

『ウォルフガング・サヴァリッシュ氏に心からの感謝』

Hearty thanks to Prof. Wolfgang Sawallisch

報告 羽木光彦

■はじめに

今年 2013/2/22「NHK 交響楽団(以下 N 響)の桂冠名誉指揮者ウォルフガング・サヴァリッシュ氏が 89 歳で亡くなりました。28 年前の 1985/5/12 に日本ブラームス協会(以下 JBS)の No78 例会「W・サヴァリッシュ/ブラームス特別講演と演奏」を来日滞在中の貴重な休日にお引き受け下さり、記録と記憶に残る JBS 例会を実現して下さいました。

JBS の前身「ブラームスの会」発足の 1973 年から 12 年目、「日本ブラームス協会」に改名した 1979 年から 6 年目、1983 年のブラームス生誕 150 周年記念祭が成功して NHK の夜 7 時のニュースで取上げられてから 2 年目という年でした。そして 28 年後の奇しくも JBS40 周年の 2013 年にその生涯を閉じられました。「1985 年の JBS の No78 例会」は永く語り継がれることと思います。

JBS 特別講演の実現に至るまでのエピソードに続き、当日の冒頭のご挨拶部分を「会報」から講演要旨を「会誌」から転載して、W・サヴァリッシュ先生に心からの哀悼と感謝の意を表したいと思います。

1973 年 NHK ホールの開館と同時に筆者は N 響定期会員となり、W・サヴァリッシュ氏の指揮する『端正なブラームス』を毎回楽しみにしておりました。1980 年の夏のことです。偶然、前田昭雄先生の監修による W・サヴァリッシュ氏の講演シリーズ①の「シューマンの交響曲について」の NHK 教育 TV 番組を見て、これほどの内容をコンパクトに収録した番組そのものにも大変感激し、次回の番組は「ブラームスの交響曲について」に違いないと勝手に想像して心待ちにしておりました。この番組をご覧になった N 響定期会員の皆さんが同じように感じたと思います。当時の記憶でも W・サヴァリッシュ氏指揮の N 響定期ではシューマンよりブラームスの交響曲を振る機会が圧倒的に多かったからです。② そして JBS でも多くの会員が「次回のブラームスの交響曲について」を期待するようになりました。しかし 1983 年のブラームスの生誕 150 年の特別番組として放送されることもありませんでした。



当時 JBS の例会委員で企画を担当していた筆者は「ブラームスの次回番組」の NHK 放送を待つのではなく「W・サヴァリッシュ氏のブラームス特別講演」を自分たちの手で JBS 例会として実現したい、という考えに急速に変化しました。JBS 顧問の先生は海外研修留学中でご相談できず、コネが全くない当時の JBS 会長は大変でした。N 響定期に通っては出待ちで花束をお渡しして、まずは JBS という団体の存在アピールから始めていました。そしてある時、当時の JBS 会友でピアニスト杉谷昭子さんがその話を聞かれて直接交渉して下さい、お話しが一気に進み 1980 年の NHK 教育 TV 番組から 5 年後に「夢が現実」となる急展開となりました。

当日の例会は前半 W・サヴァリッシュ先生がご自身の小論文を少しずつ読み上げ、杉谷さんが通訳するという形式の講演で 90 分に及び、音楽の専門家から愛好家までが十分興味を維持できる内容でした。後半は W・サヴァリッシュ氏と杉谷昭子さんのピアノ連弾によるブラームスのワルツ Op.39 の演奏でした。尚ピアノ調律は平均律ではなく古典調律(ベルクマイスター第 1 技法第 3 番)③という貴重な演奏でもありました。



■日本ブラームス協会会報 No. 7 1985 JBS-News No. 7 1985 より 転載
第 78 回例会「W・サヴァリッシュ特別講演」1985 年 5 月 12 日(日)1pm 青山アンパティオ
JBS No78 Lecture-Concert” Wolfgang Sawallisch: My view on Brahms”
13:00 Sunday 12.May.1985 Aoyama Andantino in Tokyo

W・サヴァリッシュ氏の「はじめのご挨拶」部分のみ

Meine sehr verehrten Damen und Herrn, ich glaube ich muß mich bei ihnen bedanken daß Sie heute Nachmittag eigens Sonntag, bei so schönes Wetter, hier hergekommen sind und von mir eine Wissen was über Brahms zu hören. Ich habe zwölf Jahre das Philharmonisches Staatsorchester in Hamburg geleitet, also in der Stadt der Brahms geboren, und ich habe gleichzeitig als Chef der Winer Symphoniker in Wien, die Brahms Tradition kennengelernt. Ich darf sagen daß ich zur Musik von Johannes Brahms ein sehr tiefes Verhältnis habe, Durch die Arbeit in Hamburg und Wien an dem beiden wichtigsten Städte indem Brahms gelebt hat, habe ich auch eine sehr tiefer Bindung mit der Interpretation von Brahms Musik bekommen. Ich kann ihnen als Mitglieder der Brahms Gesellschaft in Tokio und als Freunde der Musik dises Meisters sicherlich nicht neues über J. Brahms sagen. Aber Bindung Wien und Hamburg ist mir immer schon ein Interpretation Problem bei J. Brahms aufgegangen. Und Einer dieser Gedanken soll das Thema meines Kleinen Berichtes sein.

Die Frage: Ist Brahms ein romantischer Klassiker oder ein klassischer Romantiker?

(大意)

皆様、今日こんなに良い天気、また日曜日にも拘わらず、私のブラームスについての話を聞きに来て下さって、こちらから御礼を言わなければなりません。12年間私はブラームスの生れたハンブルクで、国立フィルハーモニー管弦楽団の監督として指揮をして、それと同時にウィーン交響楽団のチーフとしてブラームスの伝統を知ることが出来ました。

私はJ・ブラームスの音楽と大変深い関係を持っていると言わなければなりません。ハンブルクとウィーンというブラームスが人生を送った二つの重要な都市での仕事を通して、私はブラームスの音楽の解釈に関して大変に深い結び付きを持ちました。東京の日本ブラームス協会会員およびブラームスの音楽の愛好家としての皆さんにはブラームスに関して新たな事をお話しすること出来ません。J・ブラームスの解釈の課題では、私にはハンブルクとウィーンの結び付きが、いつも必ず頭に浮かんだ。そしてこれ等の考察の一つが(本日の)私の小報告のテーマです。それは「ブラームスはロマン派的な古典主義者なのかあるいは古典派的なロマン主義者なのか?」という問いかけです。

■ 日本ブラームス協会誌「赤いはりねずみ(Zum Roten Igel)」第15号/1985より転載
第78回例会 ウォルフガング・サヴァリッシュ教授特別講演会
1985年5月12日(日) 於:青山アンダンティエーノ

長い間、会員の間で切望されていたウォルフガング・サヴァリッシュ教授の講演会を、私どもの第78回例会として開催できたことは、真に今年の大きなイベントであり、喜びであった。全文の発表は別の機会に譲るとして、ここではその講演の骨子を要約して示すことにしよう。

まず冒頭で、サヴァリッシュ氏はブラームスが古典派的ロマン派なのか、ロマン派的古典派なのかという命題について大きな問題提起を行った。次に19世紀音楽を概観してシューマンとブラームスの二人を避けて通れない作曲家として位置づけ、この二人の気質面、作曲作法面での類似点を述べた後、今度はシューマンの実人生と作品との文学を通しての強い結びつきに注目し、その点にこそブラームスとの相違点があることを指摘している。つまりブラームスは実人生においてシューマンの如き演劇論的補助手段(ドラマチック)を必要としない強固な自己の持ち主であった、と断定する。次に氏は、ブラームスの生まれた北ドイツの風土、プロテスタントの厳格な気風、音楽的な伝統上のブクステフーデとセバスチャン・バッハの影響について触れた。その後で氏はブラームスの全作品を概括的に俯瞰しようと試みた。作曲年代を論じてゆくのだが、初期のピアノソナタにおけるベートーヴェンからウィーン古典派の強い残光を指摘しながらも、その中に、例えば第2ソナタに溢れるようなロマン精神の発露を見出している。氏がブラームスの作品の中で特に注目しているのはピアノ協奏曲1番であり、古典派の手法に縛られてはいるが、その内容面で全く新しいものが表

現されロマン派の傾向が強く出ていることを強調した。続いて氏は第1シンフォニーを論じ、特にそのベートーヴェン第5との思想的類似点に触れながらも、ブラームスの作品が第5を手本とした作品以上に、お手本を克服した独自のものと位置づけた。評論家のエーレルスを引き、ベートーヴェンとブラームスの類似点は交響曲のみにあることを確認した。最後に歌曲と合唱曲に触れ、前者では完全に古典派の作法に基づいているとし、後者は逆に独自の性格を持つものと論じた、特にドイツ・レクイエムを、シューマンと母親の二つの死がもたらした必然的な作品とし、これにおいてブラームスが大家として完成、円熟したと主張した。「四つの厳粛な歌」を全ての作品の要石として捉えたのも注目される。最後に結論に至り、ブラームスが真に時代の子であり、徹底した音楽家であり、彼に先立つ文化遺産を相続し継承して次の時代に橋渡ししたと捉え、なおかつ自身の思想を作品に刻むことにより音楽の未来を指し示す人間、新しい時代へ向けての出発者、また逆に遅く生まれ過ぎた悲劇の人と結論し、語りを結んだ。(文責 幹事 斉藤)

■ あとがき

1985年から25年後の2010年「シューマン生誕200年」の記念企画として、1980年に放送された「W・サヴァリッシュ氏のシューマンの交響曲について」の番組VTRをJBSで鑑賞できないか、NHKアーカイブスのHPを検索したり、川口市の同施設を直接訪問して調査しましたが、残念ながら非公開番組でした。

最後にN響の桂冠名誉指揮者としてまたNHK番組を通して私達クラシック音楽愛好家に多大な影響と貴重な遺産を数多く残して下さったウォルフガング・サヴァリッシュ氏に、心からの哀悼と感謝の意を改めて表したいと思います。

(日本ブラームス協会 会長)



2013, 3, 2 HPの追憶文

参考文献

- (1)NHK教育のTV番組
「指揮について」1969、「ベートーヴェンの交響曲」1970、「シューマンの交響曲」1980
「ブルックナー」1980、「ワーグナー」1983
- (2)作曲家別 日本での指揮回数 1964~1983
ベートーヴェン(47) モーツァルト(39) ブラームス(27) ワーグナー(16)
シューマン(15) ブルックナー(14) メンデルスゾーン(13) R・シュトラウス(11)他
- サヴァリッシュの肖像—指揮者・ピアニストとして Stationen eines Dirigenten—Wolfgang Sawallisch
ハンス・ペーター・クルマン編 前田昭雄 訳 1984年(S54)日本放送出版協会
- (3)平均律と古典調律 杉谷昭子著
会誌「赤いはりねずみ」No15/1985 p.49 日本ブラームス協会